

ホトケノザ (サンガイグサ、ホトケノツツジ、カスミソウ)

牧 幸 男

春、朝晩はまだ肌寒さが残るが、陽が長くなり暖かさ増してくる。私はこの時期になるとウフィツィ美術館で鑑賞したサンドロ・ボッティチェッリの「春」を思い出す。この絵画は、美しく豊かな春の訪れを擬人的に表現していると言われている。画面の中心にヴィーナスを描き、一番右に春を運ぶ西風の神ゼフィロスや三美神等の他にオレンジが実り、



ボッティチェッリの「春」

多くの花が咲き乱れ、華やかさにあふれた作品である。

この頃、郊外を散歩すると、道端や田圃の畦道、コンクリートの隙間等に「こんなところにも?」と言いたくなる場所にホトケノザが咲いている。特に、耕作地の肥沃な場所には群生している姿を見ることができる。この植物の花をよく観察すると、花の美しさに驚くが、いわゆる雑草の認識が注目する人はほとんどいない。

「雑草」について『広辞苑』を引くと「自然に生えているいろいろな草。また、農耕地で目的の植物以外に生える草。たくましい生命力のたとえに使うことがある。」と記述されている。通常、私達は自然に生えてくる役に立たない草

類を雑草と呼んでいるが、「名もなき雑草」、「雑草のように強い」という表現に使うこともある。しかし、名前のない植物などあり得ないわけで、全て立派な名前を持っている。私達は不勉強で植物名を知らないだけの事だ。

昔から農業は雑草との戦いで、時には刈穫が皆無になってしまうこともあった。とは言え、環境が変わると雑草はすぐ姿を消したり、異常に繁茂したりすることもある。雑草などと呼ぶため、私達は関心を示さないが、よく観察すると素晴らしい植物と再認識することもある。

昭和天皇の「雑草という名前の草はない」の言葉はよく知られている。この言葉は、侍従長入江相攻編纂の「宮中侍従物語」に出てくるエピソードだ。この言葉の経緯について詳しく述べると、次のよう出来事が由来である。

昭和天皇が別荘の御用邸で夏を過ごし、帰ってこられる。その前に吹上御所の前の庭草をきれいに刈ってしまった。帰ってこられた昭和天皇からお召しがあり「どうして庭の草を刈ったのかね」とのお言葉。侍従長がとっさに「雑草が生い茂ってまいりましたので」と答えると「雑草ということはない」「どんな植物でも、みんな名前があって、それぞれ自身お好きな場所で生を営んである。人間の一方的な考え方でこれを雑草として決めつけてしまうのはいけない。注意するように」とお叱りを受けたとのこと。植物の分類研究をライフワークとしておられた昭和天皇らしいお言葉である。

この言葉を思い出しながら常陸宮華子様の先帝を偲んだ英歌が残っている。

雑草と いふ草はあらず さき みかど といひたまひし 先の帝を わか偲ふなり

ホトケノザは、身近によく生育し優雅な名前から比較的知られている植物だろう。日本の固有種と思われているが、畑作物の伝来とともに、大陸から帰化した侵入性植物である。



ホトケノザ

原産地は不明、アジア、ヨーロッパ、北アフリカと広い範囲に分布している。国内では北海道以外の本州、四国、九州、沖縄に自生しているシソ科の一年草、あるいは越年草である。茎は細く四角形で下部は多数枝分かれて群がり、高さ10~30cmに成長する。葉は対生し、縁は鈍い鋸葉で、上部の葉は半円形で柄がなく、長さ幅とも1~2.5cm、下部の葉は円形で長い柄がある。主に春に上部の葉のわきに紅紫(まれに白花 *L. albiflorum*) の小さな唇形花を数個蜜に輪生するが、蕾のままに結実する「閉鎖花」が混じることもある。花には通常昆虫により受粉する「虫媒花」と風などより受粉する「風媒花」があるが、閉鎖花とは自家受粉ができる花のことで、雑草の多くは閉鎖花を持つので、繁殖が盛んになるわけである。



群がって咲くホトケノザ

花は一年中見ることができるが、春の咲く姿が一番見事で、まるでレンゲ畑かと思うほど紅紫色に染まる風景を目にすることもある。花は小さく目立たないが、よく観察するとその可憐さに感動する。遠目では分からない美しさを秘めた花で、唇型をした小さな花に自然の造作の見事さに驚く。

古くから知られてきた植物であるが、地味な植物のためか歌謡の対象にならず、最近になってやっと詠まれるようになった。

さんがいくさ

三界草 咲き競いつつ 早春の 野辺おたやかに 夕陽がとどく 鳥海昭子

日のひかり ひとときとどき 仏の座 山口速

植物名の由来は、茎頂に咲く花の下にある大型の二枚の苞葉の姿に、仏が座っている蓮台を連想させることからこの名が生まれた。別名には、三界草、仏の綴れ、カスミソウ、車花等がある。別名の由来は、三界草は葉が段状に付くところから3階建ての屋根に見立て、仏の綴れは花と葉が段々につくから、カスミソウはあまり目立たないから、車花は葉が茎に付く姿からである。漢名は寶蓋草、元宝草ほうがいそう ほどけのざが使われる。学名は *Lamium amplexicaule* で、属名はさまざまな説があるが、ギリシア語の *laipos* (喉) から花の筒が長くてのと状に見える意、種小名は抱茎の意で葉の姿から付けられた。

薬用植物としては我が国ではあまり目立った存在ではない。中国では『中薬大辞典』に全草を生薬名「寶蓋草」と呼び、辛、苦、温で「腫れを消し、止傷、筋骨疼痛、四肢のしびれ、打撲傷等を治す」と記述されている。又、葉に含まれるイリドイド配糖体は、抗酸化作用や細胞修復作用、解毒作用に期待できるとある。

良く間違えられるのが春の七草のホトケノザである。春の七草に選ばれているホトケノザとはキク科の越年草で、標準和名をコオニタビラコ(小鬼田平子、稻槎菜) *Lapsana apogonoides* のことで注意しなくてはならない。小鬼田平子がホトケノザになったのはロゼット葉の姿からつけられたものと思われる。

小鬼田平子は食用になるが、仏の座は食用に向かない。理由は、仏の座にはイリドイド配糖体*が含まれているからである。多量に摂取すれば毒かもしれないが、少量では問題ない。外国の文献には、仏の座の若い葉は食用に供されると報告がある。

注*: イリドイド配糖体は多くの薬用植物に含まれ、それらが薬理活性に関与している可能性があると考えられている。純粋なイリドイドには心臓血管、抗肝毒性、利胆、低血糖、鎮痛、抗炎症、抗変異原性、鎮痙、抗腫瘍、抗ウイルス、免疫調節、および下剤などの広範囲にわたる生理活性がある。

花言葉は「調和」「輝く心」「小さな幸せ」である。

